

(1) 事業の実施状況について

首藤定（1890～1959、大分県臼杵市出身）は、旧満州（中国東北部）の大都市、大連を中心に活躍した実業家であると同時に、美術品をこよなく愛し、その蒐集に情熱を傾けたコレクターとして知られる。また、第二次大戦の終結間もない混乱期に大陸にあって飢餓に苦しむ同胞を救うべく、ソ連（当時）側と交渉して大連に保管していた美術コレクションと食料を交換したという美談の持ち主でもある。その蒐集美術品は、引き渡しの際作成された「首藤定蒐集美術品目録」によれば、中国の書画や肉筆の浮世絵、近世の日本画、近現代の日本画、洋画、中国、朝鮮の陶磁器等561点に及んでいる。



首藤定肖像

同コレクションはソ連にわたったまま長らく行方がわからなくなっていたが、昭和49年、モスクワで存在が確認され、翌年、その一部である福田平八郎の作品42点（「首藤定蒐集美術品目録」では対幅を一つと数えた41点）が日本政府に寄贈される（現在京都国立近代美術館所蔵）など、存在が知られるようになった。また、平成12年度に横浜市や別府市で開催された「ロシア国立東洋美術館所蔵 首藤コレクション 幻の日本画名品展」では、近世から近代にかけての日本画118点（うち「首藤定蒐集美術品目録」に記載があるものは103点）が紹介され、さらに注目を集めるようになった。

しかし、コレクションの詳細は未だ不明であり、その全容解明には県民からも強い興味が寄せられている。こうした状況を受け、平成15年度に予備調査として、4名の調査員をモスクワ市のロシア国立東洋美術館に派遣し、同館に所蔵される中国の陶磁器や書画、近世・近代の日本画等を「首藤定蒐集美術品目録」と照合しながら、当該作品の所在を確認する作業を行った。この予備調査の結果を踏まえ、平成16年度は、ロシア国立東洋美術館に所蔵される首藤定旧蔵の書画や工芸品を対象に、より詳細な内容の把握と一点でも多くの当該作品の確認を目的として、本調査（一次調査）を実施することとした。

海外調査に先立っては、昨年度同様、外務省欧州局ロシア課およびロシア大使館を訪問し、ロシアとの外交上の調整を依頼した。また、書簡やFAXを交わしながらロシア国立東洋美術館に調査の受け入れを依頼するとともに、在ロシア日本大使館を通して、訪問の日程等について協議した。

海外調査は平成16年9月19日（日）から10月1日（金）までの期間で実施した。往復の移動日をのぞき現地モスクワでの調査は10日間であった。調査団は大分県立芸術会館学芸第一課の学芸員と委嘱した外部調査員で構成した。調査員は下記の5名である。

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 神山 登 | （大分県立芸術会館 館長）〈東洋美術〉 |
| 出川 哲朗 | （大阪市立東洋陶磁美術館 学芸課長）〈東洋陶磁〉 |
| 佐藤 直司 | （大分県立芸術会館 学芸第一課長）〈日本美術・近代日本画〉 |
| 友永 尚子 | （大分県立芸術会館 主幹学芸員）〈日本美術・工芸〉 |
| 古賀 道夫 | （大分県立芸術会館 主任学芸員）〈日本美術・近世絵画〉 |



ロシア国立東洋美術館本館



ロシア国立東洋美術館別館

9月20日（日）から26日（日）までは、ロシア国立東洋美術館本館の常設展示室において、展示されている中国書画、近世・近代の日本画、中国・日本・朝鮮の陶磁器、漆器、青銅器、竹芸品、仏像、文房具等の調査を実施した。9月27日（月）から29日（水）にかけては、収蔵及び研究施設であるロシア国立東洋美術館別館（旧国立東方民族芸術博物館）に場所を移し、日本画部門で保管の近世・近代の日本画の調査、陶磁器部門で保管の中国・日本・朝鮮の陶磁器の調査並びに聴き取り調査を実施した。

当初ロシア側は、ロシア文化省の指導等もあり、美術館の収蔵保管庫に部外者が入ることを躊躇していたが、協議の末、収蔵保管庫での調査も許可していただいた。しかし、日本からの調査団が自由に作品を出し入れすることは許されなかった。したがって、ロシア国立東洋美術館の学芸員の手を煩わせて、作品を1点ずつ収蔵保管庫の収納ケースから出してもらい、作品の移動はすべてロシア側の担当学芸員にお願いするよりほかは無く、調査には非常に長い時間がかかった。また、ロシア国立東洋美術館の常設展示室で展示中の作品については、写真撮影は許可されたものの、展示ケースの外からの調査であったため、作品の裏側などに記された収蔵品番号を確認することができず、展示品を一点ずつガラス越しに観察し、「首藤定蒐集美術品目録」に基づいた台帳と照合しながら推測していくということとなった。このように、なかなか日本側の思うような完全な調査はできなかったが、担当学芸員のご厚意により相当数の作品を拝見することができ、同美術館に収蔵されている中国や日本の美術工芸作品の状況をほぼ把握することができた。

こうした状況下での調査により、平成15年度に発見した79点の作品の再確認に加え、平成16年度には17点の書画（中国画1点、日本画16点）と36点の工芸品（陶磁器25点、漆器4点、金工品5点、七宝1点、竹芸品1点）を首藤コレクションの作品として新たに推定することができた。ただし、工芸品については、同じ作品名のものがいくつもあり、また法量などから作品が特定できるデータがないため、今後の詳細な調査によって作品が入れ変わってくる可能性もある。ロシア国立東洋美術館には首藤コレクションの工芸品に関しての写真付の収蔵作品台帳が未整備ということである。また、首藤コレクションの作品が収蔵されたときの記録もなく、さらに残念なことは、陶磁器などの工芸品が収納されていた本来の木箱が失われ、伝来の手がかりとなるものが欠けていることである。

一方、「首藤定蒐集美術品目録」に記載されている洋画作品については、今年度も聴き取り調査を実施したが、やはり収蔵していないとの回答であった。これらについては、まとまってどこかに移管されている可能性が高い。

ロシア国立東洋美術館から移管された作品については、昨年度の調査の折、首藤コレクションの一部である17点の工芸品の移管先を記したリストが提供されたことを受けて、リストに掲載されているロシア国内の美術館並びに隣国の美術館などに所在確認の文書を送付したところであり、現在照会中である。

調査の合間には、ロシア側の学芸員らと交流する機会もあり、それぞれの専門とする分野の話題のほか、首藤コレクションを軸とした展覧会やシンポジウム等両館の将来的な交流のあり方についても、発展的な意見の交換を行った。これについては、三か年計画の最終年にあたる平成17年度に、ロシア国立東洋美術館から学芸員らを大分に招き、ロシアにおける首藤コレクションの意義をテーマとしたシンポジウムを開催することを考えており、平成17年度芸術拠点形成事業の申請にも盛り込んでいるところである。このような人的交流を進めながら相互の信頼関係を深め、より踏み込んだ調査を実施することで、首藤コレクションの全容も明らかになることと考える。



調査風景（常設展示室）

（2）地域との連携について

帰国後、平成15年度、16年度の調査結果をふまえ、これまでの調査の概要と成果を広く県民に紹介するために、中間報告会を実施した。首藤定の出身地である臼杵市をはじめ、県内各地より集まった80名を前にロシア国立東洋美術館が首藤定旧蔵の美術工芸作品を収蔵するに至った経緯や同作品の把握状況等について、それぞれの調査員から報告がなされた。首藤コレクションの作品図版に接した参加者からは、是非実物を観てみたいなどの感想が寄せられた。



中間報告会

会の詳細は以下のとおりである。

- ・日 時 平成17年1月28日（金） 13:30～15:00
- ・会 場 大分県立芸術会館講堂
- ・報 告 ・これまでの調査の成果について

大分県立芸術会館 館長 神山登

- ・平成15、16年度の調査概要について
大分県立芸術会館 学芸第一課長 佐藤直司
- ・平成15、16年度の調査報告について
 - ① 陶磁器（中国、朝鮮、日本）
大阪市立東洋陶磁美術館 学芸課長 出川哲朗
 - ② 中国画・日本画
大分県立芸術会館 主任学芸員 古賀道夫

（3）成果物について

平成16年度に実施した海外調査と中間報告会の内容をまとめた「平成16年度芸術会館海外美術品調査事業報告書」発行し、関係諸機関に配布した。主な内容は以下のとおりである。

- ・平成16年度調査の概要について
大分県立芸術会館 学芸第一課長 佐藤直司
- ・ロシア国立東洋美術館の陶磁器コレクションについて
ロシア国立東洋美術館 東洋東南アジア部第一部長 クィズィミンコ・ラリサ
- ・首藤コレクションの工芸品の調査とコレクションの性格
大阪市立東洋陶磁美術館 学芸課長 出川哲朗
- ・首藤コレクションの日本画
大分県立芸術会館 主任学芸員 古賀道夫
- ・中間報告会（報告の要旨）

（4）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

大分県にゆかりのある作品の調査をとおして県関係美術の基礎資料を充実させるとともに、海外調査の難しさを経験したりロシア側の学芸員らと意見を交わすことで、当方の学芸員の資質を高めることができたと思う。この成果を今後の美術館事業の企画・運営に生かすことで、より魅力のある美術館活動を県民に提供できると考える。一方、まだ研究体制が十全とはいえないロシア国立東洋美術館の学芸員らは、本事業により生まれた協力関係を自らの研究を進展させる好機とも受けとめており、引き続き首藤コレクションに係る調査・研究の成果を提供することなどにより、ロシアにおける中国美術、日本美術研究にも寄与できると考える。

また、中間報告会や新聞報道等をとおして、首藤コレクションに対する県民の関心はますます高まっており、同コレクションを媒介とすることで、県民レベルでのロシアとの文化交流活動を活発にすることも可能となろう。